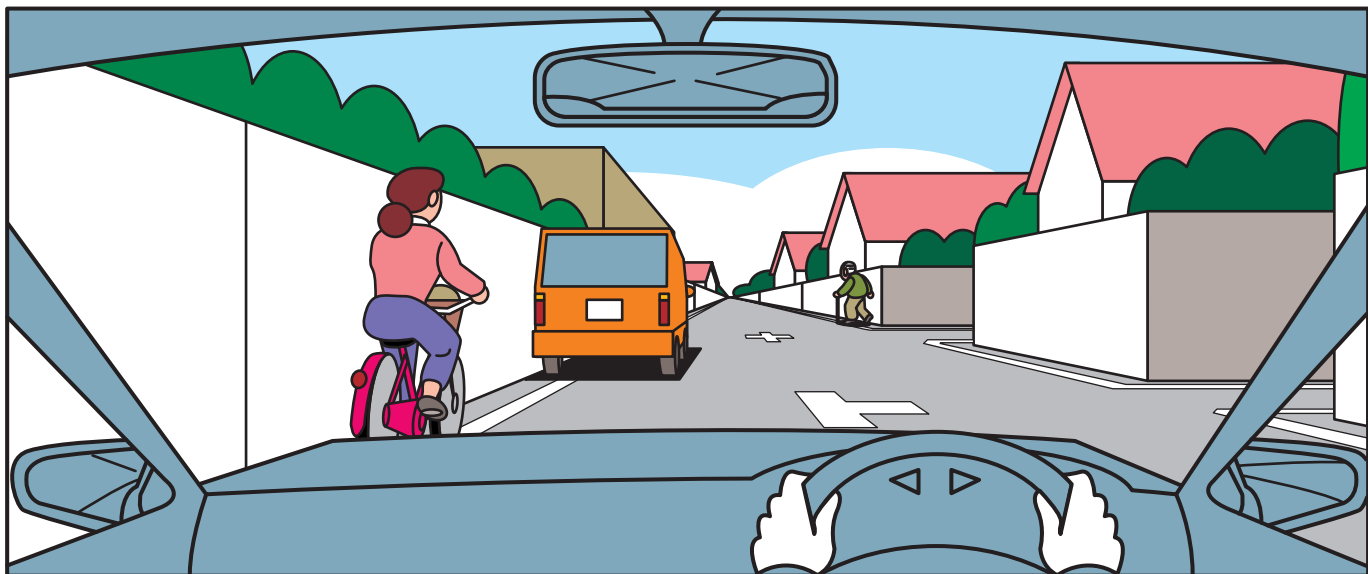


6月の安全運転のポイント 平成24年6月号

事故を防止するためには、交通場面に潜む危険を的確に予測することが大切です。そこで今月は、運転席から見た交通場面のイラストを基に、危険予測運転について考えてみましょう

住宅街の道路を走行しています。この場面にはどのような危険があるでしょうか。



主な危険の内容

この場面での主な危険をあげてみましょう(図1参照)。

前方左側の自転車が駐車車両を避けるために道路の中央寄りに進路を変えてくる。

前方右側の脇道から自転車などが飛び出してくる。

駐車車両に人が乗っている場合は、ドアが開いたり人が下りてくる。

駐車車両の向こうから歩行者が出てくる。

交差道路の右側から車両や歩行者が出てくる。

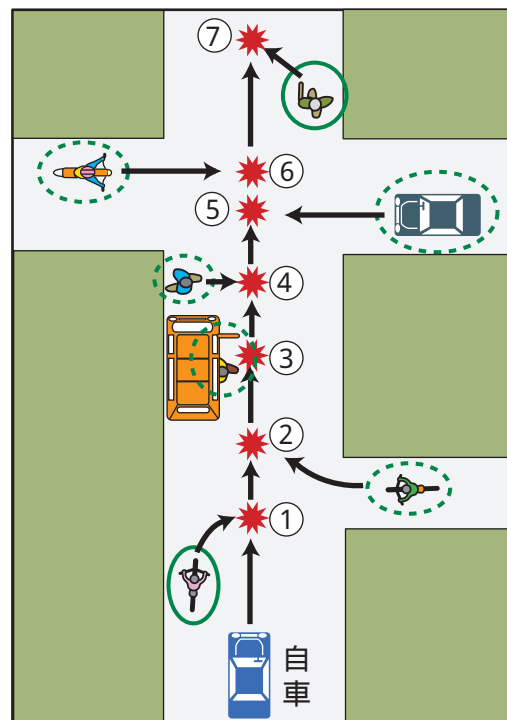
交差道路の左側から車両や歩行者が出てくる。

この場合、駐車車両の陰になり双方ともに気づくのが遅れるため、危険はより高まります。

交差点の先の右側を通行している高齢歩行者が道路を横断してくる。

上記のうち、①と②は目に見える危険であり、③～⑦は目に見えない危険です。交通場面における危険は車の進行とともに次々に変化していきますから、常に周囲の状況にしっかり目を配り、起こりうる危険を予測した運転を心がけましょう。

図1

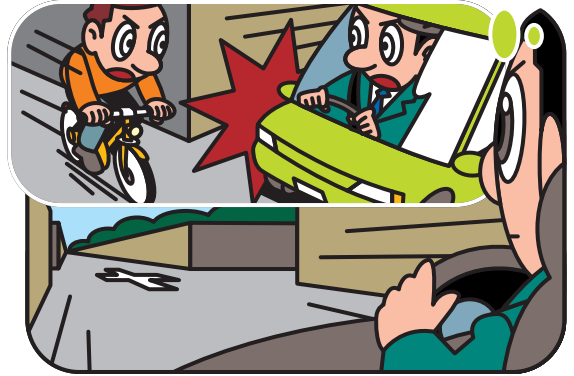




的確な危険の予測を行うためのポイント

見えない危険を予測する

危険は常に目に見えているとは限りません。例えば、見通しの悪い交差点では、交差道路側の車や歩行者は見えませんし、単路の場合でも駐車車両が歩行者を隠してしまうことがあります。また、交差点右折時に対向右折車がいる場合は、その側方を進行してくる対向直進車は見えにくくなります。こうした見えない部分に潜んでいる危険を予測した運転を心がけましょう。



相手の行動特性を知る

自転車は前方に障害物があると、後方の確認をせずに進路変更してくることがあります。高齢歩行者によっては聴覚機能の低下により周囲の音が聞こえにくくなることや、身体機能の低下により後方を振り向く動作がとりにくくなることなどから、後方から車が接近しているかどうかを確認せずに道路を横断してくることがあります。このような相手の行動特性を知っていれば、「あの自転車は後方の確認をせずに進路変更してくるかもしれない」と予測することができ、スピードを落とし自転車の動きに注意するなどの危険回避措置をあらかじめ講じることができます。危険を的確に予測し回避を行うためには、相手の特性を知ることが重要な条件となります。



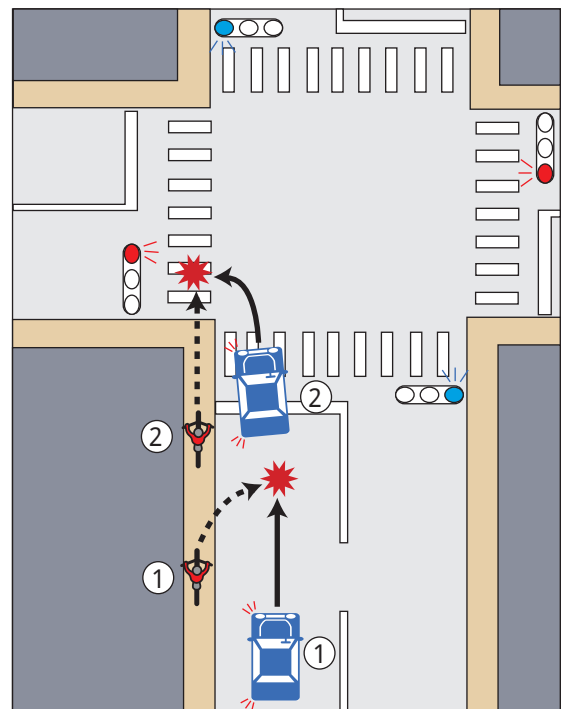
危険の現れ方は変化することに留意する

運転中の危険は車の進行とともに変化していきませんが、同じ対象でも危険の現れ方が変化することがあります。

図2は、交差点左折時の状況を示したもので、自車は左折の合図を出し交差点に接近中で、左側の歩道には自転車が交差点に向かって進行しています。

の時点では、自転車が歩道から車道に出てくる危険がありますが、の左折直前の時点ではどうなるでしょうか。この時点では自車は自転車を追い抜いて前方の視界からは消えていると考えられます。しかし、視界から消えているからといって危険も消えてしまったわけではありません。自転車の存在を忘れてそのまま左折すると、横断歩道を進行してきた自転車と衝突する危険があります。このように同じ対象でも、状況に応じて危険の現れ方が変化することがありますから、その点も十分に留意して走行することが大切です。

図2



「ご相談・お申込先」